

編集後記

科学を愛さずして栄誉を求め続け、ついに身を削す者がいる。あるいは、政道を正しくせずして権力の座にしがみつき、ついに身を滅ぼす者もいる。いずれも社会的使命を受けながらそれを覚らずして己の欲するところに執着し、迷妄の果てに苦海に没するのである。

科学する心とは、諸法の実相を観ずることである。前号Vol.41, No.3, pp.559-74「わが国アカデミア発臨床試験の国際的な信用回復の条件」の冒頭に、“Scientists explore the world as it is, rather than as they would like it to be”と記した所以である。ものごとをas it is(あるがまま)に観ることは、すなわち甚深無量なる智慧の働きであり、其の智慧の門は難解難入である。ものごとの“あるがまま”の相をみようとするが故に、臨床科学の枢軸である臨床試験においてはランダム化比較試験が為される。その深い科学の哲理、自然の摂理に考えを及ぼす時、人は自ずから蕭然として謙虚にならざるを得ないではないか。

バルサルタン問題に関して本号で多くの論稿が集められたが、そもそも問題にされた一連の論文は科学論文として“あるがまま”の記述か、という観点でみるならば、それはNoである。極めて単純化するというならば、この類の論文を100点満点で採点したとして、二重盲検ランダム化比較試験でない場合はマイナス50点、コンプライアンスについて記されていない場合はマイナス20点、客観的なハードなエンドポイントでない場合はマイナス20点、となり、一連の論文は全て10点以下といってよいのである。たとえそれがトップジャーナルに出版されていても、そのようにみてよい。私は幾多のメディアの取材に応じてきたが、その都度、「ゴミ箱からゴミを引っ張り出してきて、そのゴミについた汚れをみて、誰がなぜつけたのか?と問うに等しい」と申し上げてきた。いやしくも論文を読む者が科学者であるならば、このような論文がおよそ“あるがまま”を記述してはいないであろうことは直ちに見抜けなければならない。

“あるがまま”という点でいえば、現代社会において科学はビジネスと一体である。企業は激しい販売競争の中で売り上げを維持ないし伸ばさなければならない。そこで大規模臨床試験が仕掛けられる。その意味については、すでに本誌Vol.38, No.4, pp.869-84「わが国における大規模臨床試験の振興について」で述べたとおりである。臨床科学は人々を苦から救うために智慧を結集して行う事業であり、科学の理法を修め、かつその使命に目覚めた者のみ乃し能く究尽するのである。

(福島雅典)